

# なんだ、まねごとか

あれは中学一年の頃のことだ。木造家屋の二階に造られた六畳一間が私に与えられた生活空間で、部屋は天井がなく屋根裏感覚の住み心地で快適だった。学校から帰ってきて机に向かってノートを整理していたら、階段を上ってくる父親の足音がする。

私は勉強している姿を見てもらおうと振り向きもせず教科書に目を走らせていたのだ。ただそのとき本当に勉強していたのか、それとも演技で読書のふりをしていたのかは記憶にない。なぜならば帰宅しからの自習は毎日の習慣になっていたからだ。

私の後ろに立った父親は背中越しに机上を一瞥して、ひとこと言ったものだ。私はその言葉を絶対に忘れることがない。おそらく生涯を終えるその日まで忘れることはないだろう。父親の放ったそのひとことは、

「なんだ、まねごとか」

である。夢中で勉強している姿を見せて、何も褒めてもらおうなどと甘えていたわけではない。せめて常日頃遊んでばかりいる誠之助が、机に座ることもあるのだなと認めてほしかったのだ。この言葉は子ども心にそれこそグサッと突き刺さり、以来今日に至るまで憤怒となって私を励ましてくれている。

乳児期に両親を失った私は、敗戦直後のどさくさで養家の離散に遭い、流浪に近い少年時代を送っている。ようやくたどり着いた伯父の家で、捨てられないように気遣いして成長したのだ。伯父に養子縁組してもらったのは青年期になってからのことで、中学時代は居候そのものだったわけだ。だから尚更に勉強している姿を見てもらいたかったのだ。必死でいる少年の背中に刺さった無残な言葉の一撃は、ああ、決して忘れることがない。

小僧から叩き上げて一家を構えた骨董商の養父は、人情にはもろいが言葉がきつかった。これは明治生まれの典型かもしれない。だから私は他人にたいして、どんなときでも思いやりの言葉をかけることを大切にしているのだ。



1938年、東京生まれ。古美術鑑定家。戸栗美術館理事。東洋古陶磁器の魅力を世に広める。1994年放送開始の「開運!なんでも鑑定団」(テレビ東京系)にレギュラー鑑定士として初回より出演、鋭い鑑定眼と歯切れのよい江戸っ子トークでお茶の間の人気者に。著書に、『ニセモノ師たち』(講談社)、『天下の茶道具、鑑定士・中島の眼』(淡文社)、『真贋のカチマケ』(二見書房)、『俳枕・草枕・腕枕』(本阿弥書店)など多数。